

ソーシャル・サポートが死別経験への意味付けを介して 大学生の成長感に与える影響

松崎倫子¹⁾・徳田智代²⁾

要約

本研究では、ソーシャル・サポートが死別経験への意味付けを介して大学生の成長感に与える影響について検討することを目的とした。死別経験を持つ大学生133名を対象に質問紙調査を行った。その結果、「家族ソーシャル・サポート」は「死別経験に対する意味付け」にプラスの影響を及ぼしていた。さらに「死別経験に対する意味付け」は「成長感」にプラスの影響を及ぼしていた。これより、家族の支えが死別経験を肯定的に意味付ける上で重要な要因であることが明らかとなった。加えて、死別経験に対する意味付けが肯定的になることで成長感が高まることが示唆された。一方で、「友人ソーシャル・サポート」は「死別経験に対する意味付け」に影響を及ぼしておらず、「成長感」に対して直接プラスの影響を及ぼしていた。友人からの支えは、死別経験への意味付けを肯定的にしないまでも、成長感を高めるために重要であることが示唆された。

キーワード：死別経験，ソーシャル・サポート，意味付け，成長感

重要な他者との死別経験は、人生において最も悲しく、ストレスの負荷が高い出来事のひとつである。特に、子どもにとって、愛着対象との死別経験はその後の発達に大きな影響を及ぼす（近藤・竹内，2014）。杉本(2001)によれば、子どもは6～8歳で死の概念をほぼ理解することができるという。また、飯原・生野・山・津村（2000）の成人以前に親を亡くした遺児52名を対象とした調査においては、親を喪失した直後の感情は「喪失感」「ショック」が強く、その感情は12～15歳が最も強いこと、また、12～15歳では「罪悪感」、16～19歳では「混乱」の感情が強いことが明らかにされている。瀬藤・黒川・石井（2011）は、死別を経験した子どもが寝つきの悪さや頭痛、腹痛などの身体的反応を示すこともあると述べている。これらのことから、子どもは幼い頃から死別を理解し、その経験から心身への影響を大きく受けていることが推察される。さらに、瀬藤他（2011）によれば、大人は、死別経験後数ヶ月

は非常に強い悲嘆反応を示し、時間経過とともに徐々に落ち着いていくのに対し子どもは、成長過程の中で喪失対象の死を何度も追体験し、その都度悲嘆的感情を感じており、死を乗り越えるには長い年月を要することもあるという。すなわち、同じ死別経験であっても経験する時期の違いによって、まったく異なった意味を持つと考えられる。しかし、日本の死別経験に関する研究においては配偶者や子どもを亡くした親が対象であるものが多く、幼い頃に死別を経験した者を対象とした研究はほとんど見られない。

ところで、都筑(1993)は、過去を振り返りつつ、未来の目標の実現に向けて生きていくことが青年期で初めて可能になるとしている。また、植之原（1993）は自我同一性達成と過去の経験との関連について検討し、同一性達成の過程では経験を再構成し、自己との関連が深まることを明らかにしている。これらのことから、大学生は経験を振り返り、自己として取り入れている

1) 久留米大学大学院心理学研究科

2) 久留米大学文学部心理学科

時期であると推測でき、過去に経験した死別経験においても同様に振り返りつつ、自己の一部として何らかの意味を見出していると考えられる。

これまでの死別研究においては、遺族の複雑性悲嘆、抑うつ、希死念慮の出現率と関連因子（坂口・宮下・森田・恒藤・志真, 2013）や死別経験後に生じる二次的ストレスと心身の健康の関連（坂口, 2001）など、ネガティブな側面に焦点を当てた研究が多い。しかしながら、近年、欧米においてStress Related Growth (SRG)が注目されはじめ、死別経験などのストレスフルな出来事がポジティブな変化をもたらすことが指摘されるようになった。日本においても、死別経験後の遺族の肯定的変化について研究が行われている。渡邊・岡本（2005）は、死別経験の有無によって人格的発達に相違が見られるかについて調査している。その結果、死別経験有り群が死別経験無し群よりも人格的発達得点が高く、人格的発達が生じることが示された。同様に、河野（2013）においても、死別経験後の主観的な変化について、否定的な側面だけでなく、「成長」や「感謝」といった肯定的な側面での変化があることが示唆された。また、東村・坂口・柏木（2001）によって、死別経験による主観的成長の程度を測定するための死別経験による成長感尺度も開発されており、死別経験後の肯定的変化への関心が高まっていることが窺える。そこで、本研究では死別経験後の肯定的な変化に着目し、その中でも成長感を取り上げる。

死別経験による成長感を高める要因の一つにソーシャル・サポートが挙げられる。福岡・安藤・松井（2004）は死別経験後の友人と家族からのソーシャル・サポートと肯定的および否定的な心理的变化について検討し、死別経験後のソーシャル・サポートと肯定的な心理的变化に正の有意な相関があることを明らかにした。このことより、死別経験後に周囲からのサポートが得られた人は肯定的な心理的变化を経験することが示された。また、宮島・別所・細谷（2004）は、配偶者と死別した高齢女性を対象に死別経験による成長感の関連要因を検討し、情緒的サポートを受けている者は受けていない者よりも成長感が高いことを示した。このように、ソーシャル・サポートと死別経験後の成長感との関連が示されているものの、ソーシャル・サポートがどのようにして死別経験後の成長感に影響を及ぼしているのかは明らかにされていない。

また、死別経験における成長感に影響を与える要因として、死別経験に対する意味付けが挙げられている。大塚（2008）は、死別経験を含めた喪失体験に対する

意味付けと体験に起因する自己成長感との影響関係を検討し、死別経験に対する肯定的な意味付けが自己成長感を高めることを明らかにした。坂口（2002）の研究からは、死別経験後の適応過程において、過去への肯定的評価が悲嘆等の否定的な影響への緩衝要因となることが見出されており、死別経験への意味付けは死別経験後の肯定的な変化に大きく関係すると考えられる。

さらに、死別経験に対する意味付けは対人関係の中でなされることが示されている。Neimeyer（2006）は、グリーフワークの大部分は他者との関わりの中で行われるとしており、周囲の人からの助けの重要性を述べている。そして、死別経験に対する意味の再構成に効果的な方法は「自分のストーリーを好意的に聞いてくれる人たちに繰り返し話すこと」であるとしている。また、倉西（2012）は、遺児のセルフヘルプグループ（SHG）の意義について検討するため、SHGに参加した遺児にインタビュー調査を行っている。その結果、遺児は死別経験に対し、「自分そのものであって、弱さではなくて自分の強さ」であると認識し、死別経験を「自分が前に進むためにはそれが必要」であると感じていることが明らかとなった。つまり、SHGのような助け合いの場において、他者を通じて自己への気づきを深め、死別体験を再構築していくことが示された。これらの先行研究から、死別経験後に周囲からの支え、すなわちソーシャル・サポートを受けることで死別経験に対する肯定的な意味付けが促進される可能性がある。

以上のことから、本研究では、死別経験を持つ大学生の成長感に及ぼすソーシャル・サポートの影響について、死別経験に対する意味付けに注目したモデルを検討する。すなわち、ソーシャル・サポートの有無や質により死別経験に対する意味付けに差異が生じ、結果として成長感に差異が見られるという仮説を検討することを目的とする。本研究の仮説は次の二点である。一点目に、ソーシャル・サポートを受けている人ほど、死別経験を肯定的に意味付けており、肯定的に意味付けを行うことで成長感を高める。二点目に、ソーシャル・サポートにおいて、情緒的および所属的サポートが得られることで、「ポジティブな側面への焦点づけ」「出来事のもつメッセージ性のキャッチ」がなされ、成長感を高める。また、評価的サポートが得られることで「出来事を経験した自己に対する評価」がなされ、成長感を高める。

方法

調査協力者

調査協力者は、A県にある私立大学に所属する大学生1年～3年生計301名であり、そのうち6歳から現在までに大切な人（祖父母、父親、母親、きょうだい、友人、恋人）との死別経験を持つ者を対象とした。質問紙を配布したうち、279名より質問紙を回収し（回収率92.7%）、死別経験を持たない者および記入漏れや不備のあった146名を除外した133名（男性49名、女性83名、不明1名）を分析対象とした。平均年齢は19.16歳（SD=1.14）であった。

調査期間

2016年1月下旬から2016年6月上旬に調査を実施した。

調査手続き

大学の講義中に一斉に質問紙を配布し、回収を行った。

質問紙構成

質問内容および尺度を以下に示す。

1. フェイスシート

性別、学年、家族との死別経験の有無、死別した対象、死別経過年数、対象の死因について尋ねた。

2. 経験に対する肯定的・否定的評価

死別経験から現在までにその経験をどのように評価したかについて測定するために、伊勢（2008）の喪失体験の認知的評価尺度を使用した。肯定的に経験を評価している「意味付け」因子と否定的に経験を評価している「否定・回避的評価」の2因子で構成され、8項目からなる。「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の4件法で回答を求めた。

3. 経験に対する肯定的な意味付けの具体的な内容

死別経験に対して経験当時から現在までにどのような肯定的な意味付けを行ってきたかを測定するために、

宅（2005）のストレスに対する意味の付与尺度を使用した。「ポジティブな側面への焦点づけ」、「出来事を経験した自己に対する評価」、「出来事のもつメッセージ性のキャッチ」の3因子、13項目からなる。「全くあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」の4件法で回答を求めた。

4. ソーシャル・サポート

死別経験におけるソーシャル・サポートを測定するために、片受・大貫（2014）の大学生用ソーシャル・サポート尺度を使用した。「評価的サポート」「情緒・所属的サポート」「道具・情動的サポート」の3因子、23項目からなる。家族、友人からそれぞれのくらしいサポートを受けたかについて回答してもらい、「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の4件法で回答を求めた。

5. 成長感

死別経験による成長感を測るために、東村・坂口・柏木（2001）における成長感尺度を使用した。「人間関係の再認識」、「自己の成長」、「死への態度の変化」、「ライフスタイルの変化」、「生への感謝」の5因子、25項目からなる。「全くあてはまらない」から「とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。

倫理的配慮

倫理的配慮として、文書と口頭により、研究目的を説明した上で、調査結果は個人が特定されたり、プライバシーが侵害されたりすることはないこと、回答は任意であり、協力の同意を得た後であっても途中で中断できること、答えたくないことには答えなくていいことを説明した。また、回答中または回答終了後、不快感や落ち込み等の気分の不調が生じた場合には申し出てもらい、その対応として臨床心理士による面接を速やかに行うことも説明し、研究協力者全員に同意を得た。

表1 調査協力者の属性

死別対象者		経過年数		死因		親しさ	
祖父	79	7年以上	53	病死	110	親密だった	69
祖母	37	3年以上7年未満	46	事故死	5	やや親密だった	37
祖父母	4	1年以上3年未満	24	自死	3	やや疎遠だった	20
父	4	1年未満	10	その他	11	疎遠だった	7
母	0			わからない	4		
友人	8						
恋人	1						

結果

1. 調査協力者の属性

表1に本研究の調査協力者の属性をまとめたものを示す。死別の対象者は祖父母、死因は病死が8割以上を占めていた。また、親密さについては「親しい」「やや親しい」と回答した者が8割を占めていた。経過年数については、3年以上経過している者が7割以上を占めていた。この結果から、今回は続柄や親密さ、経過年数等の属性による影響の差異はないとみなし、全てを対象に分析を行うこととした。

2. 喪失体験の認知的評価尺度とストレスに対する意味の付与尺度、ソーシャル・サポート尺度の検討

喪失体験の認知的評価尺度(伊勢, 2008)、ストレスに対する意味の付与尺度(宅, 2005)、大学生用ソーシャル・サポート尺度(片受・大貫, 2014)において、その評定値を項目得点とし、各尺度の因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った。また、大学生用ソーシャル・サポートは「家族」「友人」の対象別に分析を行った。

ストレスに対する意味の付与尺度と喪失体験の認知的評価尺度

ストレスに対する意味の付与尺度の因子分析を行った結果、固有値の値や因子負荷量から1因子構造と解

釈することが妥当であると判断した。喪失体験の認知的評価尺度を因子分析した結果、2因子構造の解釈が妥当であると判断した。

ストレスに対する意味の付与尺度が1因子構造と判断されたため、喪失体験の認知的評価尺度の1因子である「意味付け評価」との類似が考えられた。そこで、ストレスに対する意味の付与尺度と喪失体験の認知的評価尺度の主成分分析を行い、合成得点とし、主成分得点を意味付け得点とすることとした。

大学生用ソーシャル・サポート尺度：「家族」

因子分析の結果(表2)、固有値の値や因子負荷量から1因子構造と解釈することが妥当であると判断した。「評価的サポート」「情緒・所屬的サポート」「道具・情動的サポート」の全ての項目を含むことから、「家族ソーシャル・サポート」と命名した。 α 係数は、.97と信頼性は高かった。

大学生用ソーシャル・サポート尺度：「友人」

因子分析の結果(表3)、固有値の値や因子負荷量から1因子構造と解釈することが妥当であると判断した。「評価的サポート」「情緒・所屬的サポート」「道具・情動的サポート」の全ての項目を含むことから、「友人ソーシャル・サポート」と命名した。 α 係数は、.98と信頼性は高かった。

表2 大学生用ソーシャル・サポート「家族」の因子分析結果

	因子1
22 あなたの成果を労ってくれる	0.88
19 あなたの努力や心がけを評価してくれる	0.88
15 あなたの成果に感謝してくれる	0.87
17 あなたの努力や心がけを労ってくれる	0.87
10 あなたの努力や心がけに感謝してくれる	0.86
18 あなたの良いところをほめてくれる	0.84
7 あなたに期待してくれる	0.83
6 一緒にいて楽しい時間を過ごしてくれる	0.81
23 あなたを信頼してくれる	0.81
20 あなたの個人的な話を聞いてくれる	0.80
12 決心がつかないときに、アドバイスしてくれる	0.80
8 分からないことがあるときに、教えてくれる	0.80
3 一緒に遊びに出かけてくれる	0.77
14 あなたの悩みやグチを聞いてくれる	0.76
2 問題解決方法について、アドバイスしてくれる	0.75
13 他者の前であなたを評価してくれる	0.75
1 あなたの成果を評価してくれる	0.75
11 あなたの気持ちを落ち着かせてくれる	0.75
5 新しいことを学びたいときに教えてくれる	0.74
4 どうしたら良いか助言してくれる	0.74
16 あなたに必要な情報を与えてくれる	0.71
21 あなたが間違ったときに指摘してくれる	0.71
9 気分転換に付き合ってくれたり、遊びに連れて行ってくれる	0.69
因子寄与率	14.59
累積寄与率	63.46%

表3 大学生用ソーシャル・サポート「友人」の因子分析結果

	因子1
19 あなたの努力や心がけを評価してくれる	0.91
8 分からないことがあるときに、教えてくれる	0.91
18 あなたの良いところをほめてくれる	0.90
12 決心がつかないときに、アドバイスしてくれる	0.90
11 あなたの気持ちを落ち着かせてくれる	0.90
4 どうしたら良いか助言してくれる	0.89
22 あなたの成果を労ってくれる	0.88
23 あなたを信頼してくれる	0.88
9 気分転換に付き合ってくれたり、遊びに連れて行ってくれる	0.88
15 あなたの成果に感謝してくれる	0.88
17 あなたの努力や心がけを労ってくれる	0.88
10 あなたの努力や心がけに感謝してくれる	0.87
13 他者の前であなたを評価してくれる	0.86
3 一緒に遊びに出かけてくれる	0.86
20 あなたの個人的な話を聞いてくれる	0.86
6 一緒にいて楽しい時間を過ごしてくれる	0.86
7 あなたに期待してくれる	0.85
14 あなたの悩みやグチを聞いてくれる	0.85
21 あなたが間違ったときに指摘してくれる	0.85
16 あなたに必要な情報を与えてくれる	0.84
1 あなたの成果を評価してくれる	0.82
2 問題解決方法について、アドバイスしてくれる	0.82
5 新しいことを学びたいときに教えてくれる	0.81
因子寄与率	17.54
累積寄与率	76.29%

3. 相 関

家族ソーシャル・サポートと友人ソーシャル・サポート、意味付け、成長感におけるそれぞれの相関係数を算出したところ、表4のような結果が得られた。家族ソーシャル・サポートは意味付け、成長感と有意な正の相関を示し、友人ソーシャル・サポートは意味付け、成長感と有意な正の相関を示した。また、意味付けは成長感と有意な正の相関を示した。

表4 ソーシャル・サポート(SS)と意味付け・成長感の相関分析

	家族SS	友人SS	意味付け	成長感
家族SS	1			
友人SS	0.68**	1		
意味付け	0.40**	0.38**	1	
成長感	0.57**	0.55**	0.57**	1

** $p < .01$

4. 成長感モデルの検討

相関分析の結果より、家族ソーシャル・サポート、友人ソーシャル・サポートのそれぞれが意味付け、成長感と関連していること、意味付けが成長感と関連し

ていることが示された。

そこで、家族ソーシャル・サポートと友人のソーシャル・サポートが意味付けを媒介要因として成長感に影響するというモデルを仮定し、パス解析を行った。分析にはAmos21.0(IBM)を使用した。家族ソーシャル・サポートと友人ソーシャル・サポートは観測変数が1つしかないため、モデルを識別させるために、誤差変数の分散を豊田・前田・柳井(1992)に従い、信頼性係数と分散の値から算出し、家族ソーシャル・サポートは6.895、友人ソーシャル・サポートは5.226に固定した。なお、家族ソーシャル・サポートと友人ソーシャル・サポートの間には相関を仮定した。

図1に結果を示す。 $\chi^2(14) = 6.718 (p = .945)$ 、各適合度指標の値はGFI = .988、AGFI = .968、CFI = 1.00、RMSEA = .000であり、高い適合度が得られた。パス係数については、家族ソーシャル・サポートから意味付け、意味付けから成長感のそれぞれのパス係数が.27、.43、家族ソーシャル・サポートから成長感のパス係数が.30、友人ソーシャル・サポートから成長感へのパス係数が.23で有意であった。

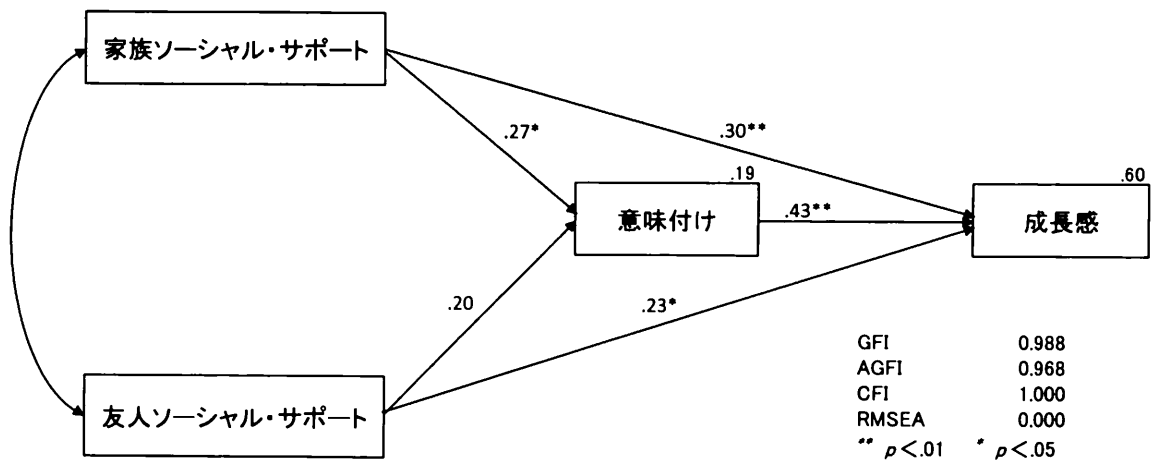


図1 ソーシャル・サポートと意味付け・成長感の影響分析

考 察

家族ソーシャル・サポートと意味付け、成長感の影響関係から、家族ソーシャル・サポートは意味付けに正の影響を及ぼしていることが明らかとなった。このことから、家族からのソーシャル・サポートが死別経験に対する意味付けを肯定的なものへと再構築することが示唆された。本研究の調査協力者の死別対象は家族がほとんどであり、調査協力者の家族も同様の経験をしていることが推察される。倉西（2012）は、遺児の死別経験後の家族関係の変化として、一度は死がタブー化されるものの、その後に関係性が変化し、死別経験についての話題が自由に顕在化し、共有されることを示唆している。また、峰島（2005）の研究からは、死別経験を持つ青年にとって、同性の家族と辛さや苦しさを分かち合う「同性の家族からの支え」や、「家族で故人と向き合う」という行動が、悲しみと向きあう中で助けとなることが明らかとなっている。すなわち、家族は同じ経験を共有できる存在であり、そのような家族からのサポートを受けることは死別経験と向き合うことへの助けに繋がる可能性が考えられる。ゆえに、家族からのソーシャル・サポートが意味付けに影響を及ぼしたものと考える。

また、意味付けは成長感へ正の影響を及ぼすことが明らかになった。意味付けは家族ソーシャル・サポートから正の影響を受けていることから、家族のソーシャル・サポートを受けることによって、死別経験に対する意味付けが肯定的になり、成長感がより高まる可能性があることが示唆された。よって、仮説1は一部支持されたと言える。成長感の内容には、死別経験後の人間関係の再認識や自己の成長などが含まれていた。死別経験を振り返り、意味付けが肯定的になることにより、その経験をしたことによって生じた人間関係や自分自身の変化についても、肯定的な側面に目を向けることができ、成長感が高まるのではないかと考えられる。

一方で、友人ソーシャル・サポートによる意味付けへの影響は示されず、友人のソーシャル・サポートが死別経験に対する意味付けを介して成長感に影響することは示されなかった。よって、友人からのソーシャル・サポート、意味付け、成長感の影響関係において、仮説1は支持されなかった。しかし、友人ソーシャル・サポートは成長感に直接影響を及ぼしていることが明らかになった。この結果は、福岡他（2004）の友人からのソーシャル・サポートが死別経験後の遺族に肯定

的な変化を促すという知見と一致する。すなわち、友人からソーシャル・サポートを受けることは、死別経験後の意味付けに影響を与えないものの、友人からのソーシャル・サポートも死別経験後の心理過程の中で死別経験を持つ大学生にとって重要な支えとなっていることが考えられる。

本研究において、大学生用ソーシャル・サポートとストレスに対する意味の付与尺度の因子分析を行ったところ、ソーシャル・サポートと意味付けの尺度のそれぞれが1因子構造となったため、具体的にどのようなソーシャル・サポートがどのような意味付けに影響するかについては明らかにできなかった。よって、仮説2は検証することができなかった。大学生用ソーシャル・サポート尺度（片受・大貫，2014）とストレスに対する意味の付与尺度（宅，2005）のそれぞれの尺度はどちらも信頼性と妥当性が検討されていたものの、さらなる検証と精密化が必要であることも指摘されている。そのため、死別経験を持つ大学生を調査協力者とした本研究においては、尺度の因子構造に変化が生じたと考えられる。

今後の課題

本研究の限界と今後の課題について、二点述べる。

一点目に、調査協力者の属性の分類についてである。本研究では、死別対象や死別対象の死因、経過年数などを分類せずに検討を行った。本研究の協力者の対象年齢により、死別対象や死因経過年数に偏りが生じ、分類することに限界が生じた。しかしながら、死別対象や死因によって死別経験後の遺族への影響は異なるという知見（宮林・安田，2008；坂口・柏木・恒藤・平井・池永・田村，1999）もある。今後は、死別経験を持つ調査協力者の特徴を分類し、それらにどのような違いがあるかを明らかにするとともに、それぞれの特徴に応じて必要なソーシャル・サポートや意味付け方を検討していく必要がある。

二点目に、具体的なソーシャル・サポートの質と死別経験に対する意味付けについてである。本研究では、どのようなソーシャル・サポートが意味付けを肯定的にする上で効果的であるかは明らかにならなかった。今後は、実証的な研究を重ね、肯定的な意味付けを促すソーシャル・サポートを具体的に検討していく必要がある。

引用文献

- 福岡欣治・安藤清志・松井豊(2004). 死別体験後のソーシャル・サポートと心理的適応に関する予備的検討 静岡文化芸術大学研究紀要, 4, 55-60.
- 東村奈緒美・坂口幸弘・柏木哲夫(2001). 死別経験による成長感尺度の構成と信頼性・妥当性の検証 臨床精神医学, 30, 999-1006.
- 飯原千恵・生野照子・山祐嗣・津村裕子(2000). 親を亡くした遺児の心理的ケア 心身医学, 40, 80.
- 伊勢麻衣子(2008). 知覚されたソーシャルサポートからみた喪失体験の開示が適応に及ぼす影響 武蔵野大学大学院人間社会・文化研究, 2, 11-23.
- 片受靖・大貫尚子(2014). 大学生用ソーシャル・サポート尺度の作成と妥当性・信頼性の検討 — 評価的尺度を含む多因子構造の観点から — 立正大学心理学研究年報, 5, 37-46.
- 河野由美(2013). 遺族の死別後の主観的変化とその影響要因 — ストレス関連成長の視点から — ヒューマン・ケア研究, 14, 12-20.
- 近藤健太・竹内康二(2014). 幼少時に母との死別を経験した子どもの経過に関する研究 明星大学心理学年報, 32, 31-37.
- 倉西宏(2012). 遺児における親との死別体験の影響と意義 — 病氣遺児, 自死遺児, そして震災遺児がたどる心理的プロセス — 風間書房
- 峰島里奈(2005). 児童期・青年期に死別を経験した青年の悲哀過程におけるソーシャルサポートの探索的分析 — テキストマイニングによる分析を中心に 関西学院大学社会学部紀要, 99, 221-231.
- 宮林幸江・安田仁(2008). 死因の相違が遺族の健康・抑うつ・悲嘆反応に及ぼす影響 日本公衆衛生雑誌, 55, 139-146.
- 宮島ひとみ・別所遊子・細谷たき子(2004). 配偶者と死別した高齢女性の生活満足度に影響を与える要因 日本地域看護学会誌, 7, 23-28.
- 大塚小百合(2008). 喪失体験に対する意味の付与と自己成長感に関する研究 — 体験の領域による生じ方の差異に注目して — 九州大学心理学研究, 9, 119-131.
- Robert A. Neimeyer(2002). LESSON OF LOSS: A Guide to Coping Center for the Study of Loss and Transition.
(鈴木剛子訳(2006). <大切なもの>を失ったあなたに — 喪失をのりこえるガイド 春秋社)
- 坂口幸弘(2001). 配偶者との死別における二次的ストレッサーと心身の健康との関連 健康心理学研究, 14, 1-10.
- 坂口幸弘(2002). 配偶者喪失後における過去への肯定的・否定的評価と精神的健康との関係 心理学研究, 73, 425-430.
- 坂口幸弘・柏木哲夫・恒藤暁・平井啓・池永昌之・田村恵子(1999). 遺族が抱える精神的問題の実態 — 故人との続柄別での検討 — ターミナルケア, 9, 228-233.
- 坂口幸弘・宮下光令・森田達也・恒藤暁・志真泰夫(2013). ホスピス・緩和ケア病棟で近親者を亡くした遺族の複雑性悲嘆, 抑うつ, 希死念慮 Palliative Care Research, 8, 203-210.
- 杉本陽子(2001). 子どもの「生と死」に対する認識 日本健康医学会雑誌, 10, 2-11.
- 宅香葉子(2005). ストレスに起因する自己成長感が生じるメカニズムの検討 — ストレスに対する意味の付与に着目して 心理臨床学研究, 23, 161-172.
- 瀬藤乃理子・黒川雅代子・石井千賀子(2011). 死別を経験した子どもたちへの援助 — 悲観の複雑化を防ぐために — 腫瘍内科, 8, 51-56.
- 豊田秀樹・前田忠彦・柳井晴夫(1992). 原因をさぐる統計学 — 共分散構造分析入門 — 講談社
- 都筑学(1993). 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, 41, 40-48.
- 植之原薫(1993). 同一性地位達成過程における『事象の記憶』の働き 発達心理学研究, 4, 154-161.
- 渡邊照美・岡本裕子(2005). 死別経験による人格的発達とケア体験との関連 発達心理学研究, 16, 247-256.

Influence of Social Support on a Sense of Growth for University Students via Finding Meaning in Bereavement

MICHIKO MATSUZAKI (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)

TOMOYO TOKUDA (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

Abstract

This study aims to investigate the influence of social support on the sense of growth in university students via finding meaning in a bereavement experience. A questionnaire survey was conducted amongst 133 university students who had experienced bereavement. Results showed that “family social support” positively influenced “finding meaning in a bereavement experience.” In addition, the latter positively influenced the students’ “sense of growth.” Thus, it became clear that support from family is an important factor in finding positive meaning in a bereavement experience. Furthermore, this suggests that the sense of growth increases when positive meaning is found in the bereavement experience. However, although “friend social support” did not influence “finding meaning in a bereavement experience,” it had a direct positive influence on “sense of growth.” This suggests that support from friends may not attach a positive meaning to the bereavement experience but it is important in heightening the sense of growth.

Key words: Experienced Bereavement, Social Support, Finding Meaning, Sense of Growth